

第11回肝臓病教室

このたび、第11回肝臓病教室が平成25年11月19日に開催されました。今回も15名の受講者にお越しいただきました。今回の肝臓病教室のテーマは、「B型肝炎」です。

まず、瀬古医師より「B型肝炎の診断と治療」について講演がなされました。

日本におけるB型肝炎（HBV）キャリアは、約130～150万人（全人口の約1%）いるとされています。感染経路として、母子感染や血液や体液からの接触感染などがあります。治療としては、核酸アナログ（特にエンテカビル）、インターフェロン（特にペグインターフェロン）が中心となります。それら治療によりHBVDNA量が一定以下に減少し、ALTが正常化すれば肝硬変への進行が抑制され、肝発癌抑制が期待できます。B型肝炎ウイルスの状態、肝線維化、年齢等を考慮し適切な治療を受けるためには、肝臓専門医での診断が大切であると話されました。

続いて、松本臨床検査技師より「B型肝炎に関する血液検査」について講演がなされました。

B型肝炎ウイルスマーカーとしてHBs抗原が陽性であれば、ウイルスが肝臓にいることを示しています。HBe抗原が陽性の場合、AST、ALTの異常を認めることが多く、慢性肝炎も活動性で進行します。また、この場合、感染力が強いことを意味します。肝臓癌での腫瘍マーカーでは、AFPやPIVKA-IIなどがあります。肝臓癌以外でも、この腫瘍マーカーが高くなることもあるため、画像検査と併用で受けることの重要性を説明されました。

続いて、奥野薬剤師より「B型肝炎の治療薬」について講演がなされました。

まずは、核酸アナログ治療について話されました。この治療の作用として、ウイルスが作られるのを阻害することがあります。薬の副作用も開発とともに、年々少なくなってきていますが、一度服用すると、長期に服用し続けなければなりません。また、エンテカビル（バラクルード錠）は、食事と一緒に服用すると効果が半減するため、空腹時の服用が大切になります。次にインターフェロン治療について話されました。ゲノタイプや年齢、肝臓の状態などを考慮して、投与の判断がされます。副作用について、インフルエンザ様症状（全身倦怠感・発熱・頭痛・関節痛）や血球減少（白血球、好中球、血小板）や皮膚症状、間質性肺炎、うつなどがみられます。

それぞれの副作用は、早期に対応することで軽減されますので、まずは主治医やスタッフに相談してください。

最後に、野坂管理栄養士から「B型肝炎の食事療法」の講演がなされました。

慢性肝炎や代償性肝硬変の患者には、特別な食事はありません。バランスのとれた食事が大切になります。また、飲酒は肝障害を悪化させることがあるため禁酒することが大切です。健康的な食事として、和食では一汁三菜の例をあげて説明されました。もう一品、困った場合の対策として奈良県の旬の野菜をいくつかあげられました。それらをプラスすることにより、食卓の彩りもよくなり、地産地消で地域も活性化できること。食事は、見た目により心の栄養も摂取できることを説明されました。

消化器内科では、定期的にさまざまなテーマで肝臓病教室を開催していく予定です。

今後の予定につきましては、院内掲示や当院のホームページでご確認下さい。

